

山と博物館

第25巻 第1号

1980年 1月25日

大町山岳博物館



冬の八方

撮影 伊藤則夫

雑感

午後四時頃になると、向いのビルの窓ガラスに、冬の夕陽が反射しはじめる。それまで冷たく光っていた窓が突如として真っ赤に熱せられ、輝き始めるその瞬間を、私は毎日デスクに向いながら、楽しみに待っている。

私のオフィスは東京にある。都会に暮らしていると、自然の表情の変化など、とんと無頓着になる。しかしふとそれに気づいた時は、嬉しさもひとしおである。たとえば、通勤客でこったがえす駅の線路ぎわの草むらでコロギがひそやかに鳴いていたり、車の往來の激しい道路沿いの小公園で、山茶花の花びらが寒風にゆれていたりすると、こんなに痛めつけられているのに、よくやってくれるなあと、いとおしく思われてならない。

商売柄、生物学の最新情報には常に関心を払っている。その中には、環境保護の問題も含まれる。現在、環境保護関係の学会は、私の知りうる範囲でも約十ほどあり、それぞれ毎年活発に研究発表を行なっているが、一方では昨年、環境庁が南アルプススーパール道工事の着工を認めたことを思うと、せっかくの研究成果も行政に反映できないならば、意味がないのではないかと危惧せざるを得ない。ブルドーザーが唸り声をあげて木々に襲いかかり、なぎ倒していく様子は、想像するだけでも恐ろしい。「環境庁はひたすら環境保護に徹すればよい。」と言った大石元環境庁長官の言葉は、七〇年代の遺物として、もはやかえりみられることもないのだろうか？

八〇年代の幕あけ早々、石油問題をはじめ耳に入ってくるのは不穏なニュースばかりである。が、こんな時にこそ、自然保護を声を大にして叫ぶべきではないか。自然はわれわれに安らぎを与えるのみならず、無言のうち

に人間の奮りをいさめてくれるからである。
 (「生物学ニュース」編集部 中島博)

雪国の民具

(2)

長 沢 武

二、運搬具 (ソリ)

ソリは雪国において、古くから広く一般に運搬用具として利用されているもので、「北越雪譜」にも「幅(ソリ)は作り易き物ゆえおほかたの農商家毎に是を貯ふ。されば載せるものによりて大小品々あれども、作りやうは皆同じやうなり名も又おなじ」とあり、さらに、「そもそもこのソリという物雪国第一の用具、人力を助る事船と車に同じく、且つ作る事いと易き」と述べ、

初深雪降にけらしなあらち山越の旅人幅に
のるまで。

という歌を添え、この歌は一一一六年という古い時代に作られた歌の本に載っているもので、既にこの頃一般にソリが使用されていたことを説明している。

北アルプス北部の、白馬、小谷地方も豪雪で知られる所で、昭和の始め国鉄の大糸南線が開通する迄は、十二月から翌年の四月中旬迄は、馬極が唯一の交通機関で、安曇節にも冬の佐野坂嫁様通る通る嫁様極の上と唄われているように、辺りな所で冬季間の荷物や病人などの運搬は、ソリに頼る以外に術のないものであった。そしてこのことは当時の日本の全ての豪雪地帯に共通していることでもあった。

(1)、一般用二本櫓

「北越雪譜」にも、「ソリというものの雪国第一の用具にして、載せるものにより大小品々あれども」と述べているように、ソリは雪国における唯一無二の運搬用具であり、その使途や目的によって大きさまや型が異なっていた。

まず一般に里で日常生活に必要な物資運搬用に各家庭に備えてあったソリであるが、このソリはそれ程重い物や長い物を運搬する必要もないので、長さ四尺(一二〇センチ)巾は三尺(九〇センチ)弱、重さも比較的軽くなるようソリ本体の厚さも大きさに比例した作りとされたもので、板を打ちつけ、荷台が常時取り付けられているのが特長である。

材としては、滑りの良い軽い材を使うのが普通であるが、岐阜県の奥飛騨と呼ばれる地方では、経一・五センチの竹に穴をあけ、これを三〇本前後縫い連ねた竹ソリを使っている。

(2)、材木運搬用ソリ

雪はやっかいな物であるが、狩猟者や木材業者にとつては誠に有難い天の恵みである。道も無い山奥から直経数日もある用材の搬出も雪を利用すれば至極楽である。明治十四年十二月、東本願寺の再建に当り、信越境いの横川部落の信徒衆が、本堂の柱として樺の四尺角の大材三本を櫓で鳥越峠を引き上げ、根知谷を下し、姫川を流して京都に運んだ記録もある。

普通、二月から三月になり、積った雪がしまつて堅くなると、豪雪地帯の山村では何処でも見られるのが雪を利用しての材木の搬出風景で、これはまた山村の大切な現金収入の源泉でもあった。

この材木搬出用櫓は、一台に一〇〇〇キログラムくらいな材を積むから、それだけにガツツリした作りでなくてはならない。しかも滑りがよく、ねばりのある材質が要求される。しかし荷を下し空になった櫓を再び山上まで引き上げる苦勞は大変であるから、なるべく櫓本

体の重量は軽くしたい。これら幾つかの条件にかなつたものとして櫓材には、北アルプスの信州側ではミネバリ又はタカヤマと呼ぶヨグソミネバリや、オノオレが最高とされ、それに次ぐものでは、イタヤと呼ぶイタヤカエデ、ヤマザクラと一般に呼んでいるオオヤマザクラなどがあり、東北地方では、オノレ、オノノレなどと呼ぶオノオレ(ヨグソミネバリの仲間)でカバノキ科)を最高とし、次いでハミズネ、ミネバリ、タンデなどいろ／＼な名前と呼んでいるミズメというオノオレに似た木やハナナと呼ぶ木がよいとされてきた。ちなみに、万葉集にも歌われていて、当時朝廷へ貢物として全国からそれ／＼の特産品が献上されたその中の、信州など一部の国からた樹木名をめぐって昔から大部議論がなされたが、結局ヨグソミネバリの材とされたという結論に達した。弓も櫓と同じくミネバリ強く弾力のある木が要求されるものであつて、山村の人達は古くからそのことを生活の知恵で知っていた訳である。



木出し櫓 (右の櫓には梶棒がついている)

イ、二本ソリ

材木搬出用ソリは、一般には二本ソリと呼ぶ普通型のソリを使う。北アルプスの信州側では、モツタと呼ぶ台が前後二箇所についたソリ(長さ一・七メートル)が使われ、木出し櫓といふ福島県耶麻郡ではヒラソリ又はジソリ(地櫓)といっている。岐阜県奥飛騨では、この台が後方のみであり、前方は単に杭状の止め木がついているだけのパツチ櫓(長さ一・三メートル)が広く使われている。

材木搬出用ソリの附属品としては、肩にかけて引く曳き綱の他、信州では太き手首ぐらい、長さ二メートルの梶棒と呼ぶ棒を前のセータの上から後のセータの下へ入れて縛りつける。肩へかけた曳綱で曳く他、この梶棒の先をつかまえて曳き、雪が櫓にこびり付いた時はこの棒を上下にゆすつて櫓を動かしたり、左右の梶取りや下り坂では制動用にも使う。

下り坂が急な場合は、人力だけではどうにもならないから制動具を使う。奥飛騨地方では長さ一・五メートル八分で、先が二又になりそこを針金で結びつけたソリマタ又はハヤリマタという棒を使い、下り坂でソリがはやる時その下にかつてブレーキをかけるのである。

長野県の南北安曇地方ではこのような棒は使わず、シビレ又はワツクと呼ぶ、藤葛または針金で径二十センチの輪を作っておき、急な下り坂ではこれをソリの左右のハナから入れてやる。この輪はモツタの部分で止りブレーキがかかる。一つの輪ではスピードが過ぎる場合は、二つ三つと入れてやり、不用な場所に来るとこれを抜き取つてソリに乗せる。全く合理的な制動具である。

ロ、一本ソリ

山村の暮しの中には、先人達が考え出した生活の知恵の巧妙さに、時々ハッと驚くことがある。この一本櫓もその一つで、三十度近い急斜面を、五層もある長材を一・五メートル積み、巧みに操作して下る搬出技術を見る時、よくもまあ考え出したものだと思つづく。



一本櫓 (反対にして天日に干しているところ)

感心させられる。

一本櫓が広く使われているのは長野県小谷地方などで、この櫓が使われる地域は山と谷ばかりの山峡の地が多く、一本ゾリの場合はその性質上、平地よりも急傾斜地の方が具合がよいのである。二本ゾリは急傾斜もさることながら、どうしても二層巾ぐらゐの水平な檣道を作らないと使えないが、一本ゾリの場合には水平な檣道は全く必要なく、傾斜がある程力が不要で具合がいいから面白い。

まず櫓の構造であるが、一本ゾリというように櫓は一本だけで、この上に荷物を積みパランスをとりながら滑らせるもので、その操作方法は二本櫓と全く異なり、現在のアルペンスキー術の横滑りのテクニクと同じである。ソリ本体は一本であるから櫓の巾は二本櫓の場合の一三〇前後に比べずつと広く二〇〇〜三三〇もあるのが一つの特長である。

二つ目の特長としては、二本櫓のモツタに当る部分はこちらは反対に凹部となつていて、こゝに刺し手と呼ぶ直角になつた腕木を前後二ヶ所に取り付けることで、この刺し手は積荷の全重量がこゝにかゝるので、自然木を利用

用した丈夫なものが必要となる。腕木は操作人が握る方は一・九〜二・四ほど長く、反対側は〇・九〜一・一ほどである。

材としては櫓本体はイタヤカエデカタカヤマ(オノオレカミズメ)と呼ばれるねばりのある木が、又腕木にはナラなど堅木が用いられたが、一本櫓の場合土場で荷を下すと山の上の荷積場へは人の背で背負い上げる訳で、急斜面を背負い上げる労力は大変なので、最近では軽い材を選び、櫓にはカワクラ(サワグルミ)やシナの木を使い、底にトタン板を張り腕木にはホウノキを使う者が多くなつた。ソリの操作は、急斜面ではソリを横にしたま、ソリ底面のエッジング操作で下り、緩斜面や平地では縦に操作してソリを進ませるので、スキー操作のテクニクと全く同じであるのが、このソリの特長である。

(3)、馬櫓

雪国での荷物の長距離輸送は馬櫓とポツカの背中によつてであつた。大町以北は明治の中頃東道が開通すると、ポツカは次第に影をひそめ、馬櫓による輸送が中心になつて行つた。昭和の始め、国鉄大糸南線が開業しても駅からの配達荷物や発送の為の荷物の運搬に馬櫓の利用は多く、各ムラには運送曳きと呼ばれる荷馬車業者が数人いて、雪が降ると馬車を馬櫓に切り替えて営業が行なわれた。

しかし大雪が降ると馬櫓も通行不能となる。二三日して雪が落ちてくるとまず空櫓を引かせて檣道を作り、それから後でないと荷物は積けられない。こんな新道の日馬も藁轆を履いてももぐり、その跡が落し穴のようになるので、夜道を帰る人は良くこの穴に落ち難儀をしたものである。

馬櫓は底面に鉄板を打つた大型櫓に梶棒を付けたもので、荷物運搬用のものは荷台がつけてある簡単なものであつたが、旅客用のものは箱型で屋根もあり、馬には鈴をつけて飾りもしてあつたというが、今ではそれを知っている人は少なくなつてしまつた。

三、遊具

(1)、子供用ソリ

雪国の子供の屋外での遊び用具としては、昔は櫓が本命で、一般的には二本櫓の長さ六五〜七〇センチ、巾四〇センチくらい小さなものの上に板を打ちつけたもので、これを坂の上へ引き上げ、一人か二人が乗つて滑つて遊ぶ程度のものであつた。

中にはこの櫓の先に、さらに長さ二五センチくらい小さな梶取り用の櫓をつけて、この櫓を足で操作して滑り、方向を変える仕組みのものもあつた。奥飛騨では竹櫓の小型なものがよく利用された。

(2)、木出しソリの利用

三月になり、雪面一面がクラストして堅くしまつてくると、小学校高学年の児童や高等科生は、木出し用の大型櫓に洗濯用の張り板を縛りつけ、坂の上まで大勢で引き上げ、五人以上もこれに乗り数百メートルを滑り下る豪快な遊びをする腕白少年が多かつた。

大正時代まではこんな、遊びしかなかつたようで、ソリ乗りが学校の冬の体育に取り入れられていた。大正十年三月三日の神城小学校の学校日誌にも「午前中全校児童及補習科生徒に櫓乗遊戯を行しむ」とある。

(3)、スノースケート

長さ二五センチ五センチくらい木製のスケートまがりのものを作り、これを紐で靴に繰りつけて坂道を滑る遊びもあつた。

(4)、スキー

スキー術が日本に伝つたのは明治四四年、オーストリーのレルヒ少佐によつてである。翌年から各地で講習会が開かれたが、初めの中は現在のゴルフのようなもので、庶民にまでは浸透しなかつた。それはスキーは高価なもので、軍隊や一部の知識人の間でのみ楽しまれていた程度であつた。しかし、長い冬を雪の中で過す雪国の子供達に、何かよい遊具はないかと研究していた先生達の、技術の習

得と努力によつて、大正十年前後から北アルプス地方にも子供達の間に広まつて行つた。

このスキーは北歐式のもので、初めの中は二本のスキーと一本杖であつたが、まもなく二本杖の技術が導入され、普及して行つた。ところどころこのような雪中滑走具は日本にはなかつたのだろうか。例の明治四四年、高田連隊にレルヒがスキー指導に来るといふ連絡を受けた長岡師団長と堀内連隊長は、「こんなもの(スキー)位、外国人に教えを受けなくとも日本古来の雪具を集めてスキーと対抗し、逆に日本の雪具の良さを示してやろう」と、全国から一七種類もの雪具を集めたといふがそれはどんなものだったのだろうか。

私は近年小谷村榑池の深沢憲治(明治三九年生)さんから、「私の小学校六年頃(大正六年)学校には今の一本櫓のような長さ二・七メートル、巾三〇センチ、厚さ三センチくらいで縛具の所は両端にカスガイのような金具が打つてあるスキーが六台あり、冬になると新湯操から荒川という先生が数年間指導に来て、体操の時間に滑り方の指導があつた」という話を聞き非常に興味を持ったが、この一本スキーはどこの地方のものか、又外国のスキーを真似て考案したものか是非知りたいものである。

大正十年代から昭和二十年代までの子供達のスキーは、普及したとはいっても各人が所有するまでに至つていながつた。スキーを持つていた一部の子供達も、その大半は地元製のもので、その頃、各地にはスキー大工と呼ばれる人がいて、市販のスキーを真似て手作りをしていた。材としてはイタヤカエデ、ヨグソミネバリ、ヤマザクラ、エンジュが良いとされ、先端の曲げ方には湯で曲る法と、油をぬつて火にあぶる法の二つの方法があつたが、どちらも月日がたつと次第に伸びてくる欠点があつた。

此の頃は革のスキー靴もなく、皆藁藪かゴム長靴に麻紐で繰るものがほとんどであつた。(白馬村役場・山博調査員)

郷土の生い立ちを考える (2)

平林 照雄

三、東山が海であった頃

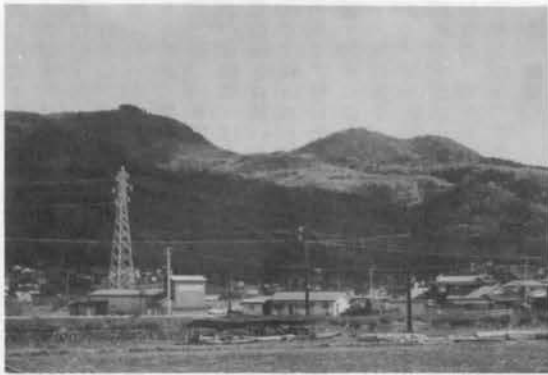
信州のような山国にも海と縁のある話が多く残っております。もちろん人の住んでいなかった地質時代の大昔のことですが、伝説と科学のギャップといてしまえない妙味のある問題です。現在では想像もつかない過去の歴史をたどってみるのも楽しみです。

西山(飛騨山脈)が陸地や山地になつてからも、東山の地域(フォッサ・マグナ)はまだ海の時代で、日本海側から大きな入り海が長野県の中北部に食い込んでおりました。この浅い海へ周囲の山地から砂礫が運び込まれて、海底に厚い地層を堆積しました。この砂礫を供給した山地は主として西山でした。今から二五〇〇万年前から二〇〇万年前まで(中新世から鮮新世)の間のできごとで、地層全体の厚さは数千mに達しました。この中には当時の海に住んでいた鯨や魚や貝の化石がたくさんはさみ込まれております。この厚い地層は古い方から順に、守屋、内村、別所、青木、小川、柵、猿丸の七累層に分けられております。大町地方の東山は猿丸累層に当たります。フォッサ・マグナの海に堆積した地層は、南から北へ行くほど新しいものになり、海岸線は徐々に北方へ後退し、陸地は南から北へとふえていきました。

フォッサ・マグナの海が最後まで残ったのが長野市方面と大北地方の入江です。大北地方の湾入は少なくとも明科付近まで食い込んでおり、ここに堆積した地層が大峰累層です。大峰累層の堆積物は西山から運び出された砂礫と、堆積時に噴火した大峰型石英安山岩の火山噴出物です。礫の種類を調べてみると、現在の高瀬川の河床礫と似ており、花崗岩類が主体です。しかし、現在の河床礫より古生

層や中生層の硬砂岩や粘板岩やチャートが多く含まれております。これは当時の西山に堆積岩がかなり残っていたため、供給源の主体が南西方向にあったためと考えられます。大峰累層の下部の方の広津の中ノ貝や日野には、二枚貝のうちの特にカキ貝の化石が多量に含まれており、堆積時は海域であったことがうかがわれます。しかし、上部の社地域では淡水性のヌマ貝やメタセコイアの球果や甲虫の羽の化石が含まれており、内陸化したことがわかります。

フォッサ・マグナに堆積した地層はその後の地殻変動で褶曲や断層ができ、火成岩に貫入されたり、新しい火山におおわれて、現在見るような中北信の山地になったわけですから、松本盆地ができたのは、すっかり内陸になつ



大町東の火山の形をした山々

てから後の新しい時代です(洪積世)。四、大峰山列はなぜ火山といえないか 昨年の十月二十八日未明、御岳火山が有史以来といわれる噴火をしましたので、最近地震の話に加えて、火山への関心が高まっております。

大町市の東側には大峰、南鷹狩山、鷹狩山、霊松寺山及び権現山などの一〇〇〇mを越える火山の形をした峰(火山形態)が山列をつくり、姫川中流まで続いております。この山列はかつては大峰火山地区と呼ばれ、大峰累層を基盤にして噴出した新しい火山と考えられておりました。もしそうだとすれば、大峰山なども御岳の二の舞にならないといえませんが、たしかにこれらの峰は形は溶岩台地や鐘状火山や円錐火山に似ており、火山の岩でできております。火山の形をしていて火山の岩でできておれば火山とするのは当然です。

大峰山列の火山岩を大峰型石英安山岩と呼び、暗灰色の粗粒な感じで、他の岩石片を混じえていたり、レンズ状の黒や白の物質を含んでおります。この特徴のある岩相が大町地方では、庭石として珍重され、よく利用されております。溶岩のように堅そうに見えますが、その大部分は高熱の火山灰が固結してできたものか(溶結凝灰岩)、これに伴って堆積した凝灰岩です。

地層の重なり方をよく調べてみると、大峰型石英安山岩が大峰累層を貫いている事実はないのです。大峰累層の礫や砂や泥でできた地層の間に大峰型石英安山岩がはさまれているのです。基盤と思っていた大峰累層の堆積時に噴出した古い火山堆積物だったわけですから、地質時代の当初から火山活動はありましたが、ある時代より古いもの(第三紀以前)は火山としては扱わず、堆積岩と共に地層の一部とみなされてしまっています。現在火山と呼ばれる山々は古い地層を貫いて噴出している新しい時代(第四紀)のものばかりなのです。



大町市役所前の大峰型の巨岩 撮影 丸山陸士

大峰累層は堆積後、地殻変動で東へ三〇度ほど傾斜し、侵食作用の結果、中にはまだ残っている大峰型石英安山岩の堅い部分が峰として残り(差別侵食)、火山の形に偶然なつたのです。大峰や鷹狩山は西の方から見ると、火山の形をしておりますが、南や北の方から見ると形は全く変わってしまっています。なお、大峰型石英安山岩は古地磁気の測定からも、古い時代(鮮新世猿丸期)のものであることがわかっております。大町市役所の玄関前には大峰型石英安山岩の溶結凝灰岩が据えられており、市民に親しまれています。(梓川高等学校長)

山と博物館 第25巻 第1号
発行所 一九八〇年一月二十五日発行
長野県大町市TEL②二一
大町山岳博物館
印刷所 長野県大町市後町
大希タイムス印刷部
定価 年額八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)一三、二九三